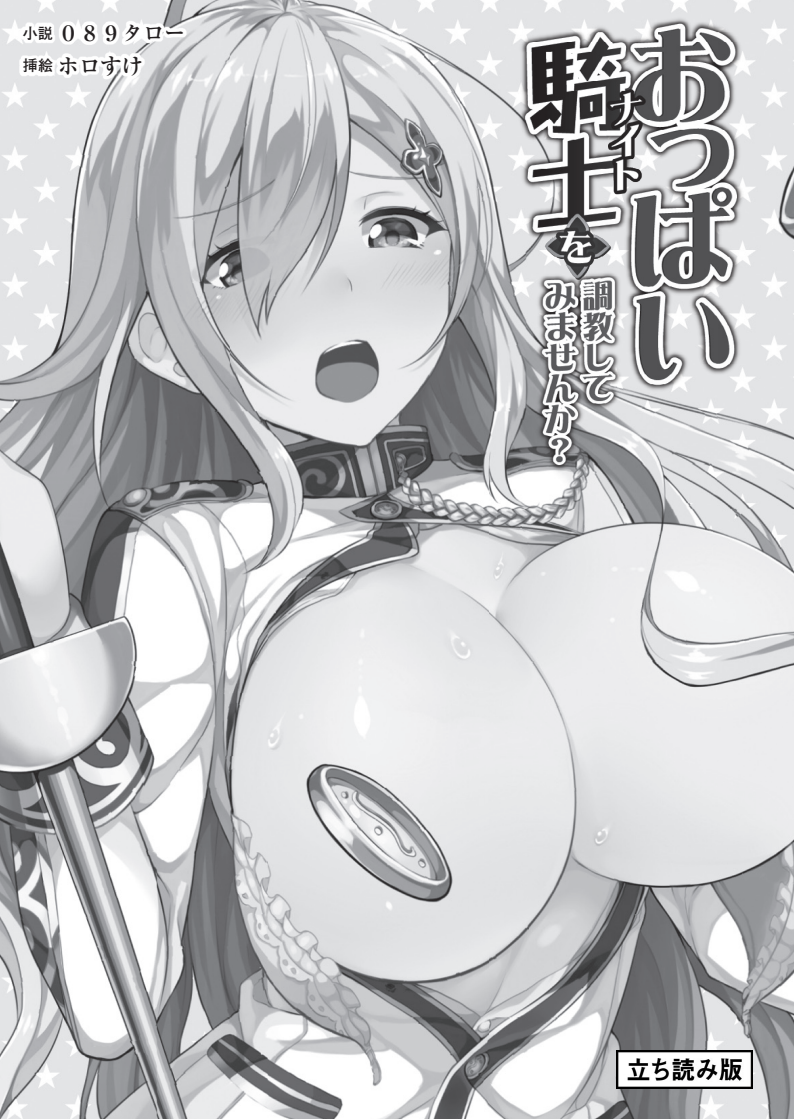
小説 089タロー
挿絵 ホロすけ
おっぱい騎士（ナイト）を調教してみませんか？
立ち読み版

序章　美少女ナイトと秘密のおっぱい　006
一章　凛々しいナイトはおっぱいが敏感！　022
二章　真面目なナイトとおっぱい特訓！　059
三章　可愛いナイトと初めての体験！　091
四章　エッチなナイトといっぱいエッチ！　130
五章　愛するナイトとＳＭ子作り♥　167
終章　おっぱいナイトとボテラブな生活♥　216

登場人物紹介

Characters

アナスタシア・フォン・ベルエスパーダ

フェンシング部に所属している少女騎士。実家は外国の貴族階級で由緒ある騎士の名門。本人もそれを誇りに思っているが、同時に悩みも抱えている様子。

千房好太（ちふさこうた）

ごく普通の学生。アナスタシアに憧れているが、胸が少々足りないと感じてもいるおっぱい大好き少年。

序章　美少女ナイトと秘密のおっぱい

春――抜けるような青空の下、一人の少年が学び舎の一角を走っていた。

「先輩、今日もやってるんだろうな――」

明るく快活そうな目は、期待感に輝いている。

少年はタオルを手に渡り廊下を抜けた。その先にある体育館に、息を弾ませて駆けこむ。

（いた、先輩――）

二階まで吹き抜けになった、広々としたフローリングの空間。その中央には、すでに多くの人だかりができていた。

男女を問わない同校の学生。スーツ姿の教師の面々。大掛かりなカメラを構えフラッシュを焚く記者たち。

彼らの向こう。皆の視線が集まる中央には、白い衣装に身を包んだ、二人の剣士の姿があった。

「ALLEZ!」

ピストと呼ばれる試合場。二人が向き合い応じたのを機に、主審が開始の合図をした。

――カッ、カカッ、カッッ……！

楕円形のマスクをつけた両者の剣が交錯する。得物は細剣。サーブルと呼ばれる種目のものだ。軽量の武器は硬質な音を立て、相手の胴体へ伸びようとする。

（先輩、押されて――？）

背筋を伸ばして戦う片方が相手の剣撃を繰り返しいなす。フェンシングの中でもサーブルは特に速度が速い。刺突だけでなく斬撃も交えての勝負だからである。

少年が見守る中、片方は劣勢かに見えた。この種目には攻撃権というものがあり、攻め側の攻撃が終わるまで守り側は反撃を認められない。

相手側の攻撃が長い――そう思った次の瞬間。

――カッッッ！

一際高い硬音と共に、攻め側の剣がパラード（払う）された。瞬間、攻撃は終了とされ攻撃権が移行する。

そして攻撃権を得たその人は、ただ一つの、しかし鋭い刺突で勝負を決めていた。

（やった！　さすが先輩、強い！）

皆が感嘆の声を漏らす中、少年は胸中で喝采をあげた。

「RASSEMBLEZ! SALUEZ!」

主審の合図と共に、試合は終わり、二人は敬礼し握手を交わした。

「やっぱり強いな彼女は。本物だ」

「相手はオリンピック候補だろ。練習試合とはいえ、それを寄せつけないなんて」
「言っちゃなんだがあれでも本気じゃなかったな。最初は様子見だったか、楽に決めちゃ面子を潰しちまうとでも思ったんだろ」
記者たちがひそひそと話し始めるのを、少年は小耳に孕む。
当然だと思った。彼女は本物の騎士で、強く、凛々しく、美しいのだから。
その彼女——堂々の勝利を得た選手が、ピストを下りてマスクを脱ぐ。
すると、長い金髪がぱっと広がり、陽光を浴びてキラキラと輝いた。
「美しいな。あれで学生なのか」
記者が呟くのも無理はない。
マスクの下から現れたのは、凛とした美貌を誇る、とてつもない美少女だった。
まず分かるのは、日本人ではないことだ。白い肌はまるで磨きぬかれた大理石のようで、青い瞳は高級のサファイアを思わせる。
やや鋭い双眸は、見事な二重まぶたと長い睫毛が飾っている。アゴはしゅっと細く、小振りな唇はルージュを引いたように薄紅色だ。
背は高く、百七十くらいあるだろう。フェンシング用の衣装越しにも、スラリとした体型がよく分かった。
手足は長く、背筋もピンと伸びていて、マスクを小脇に歩く姿がモデル並みに様になっ

ていた。女性らしい曲線を描くまろやかな臀部が小さく揺れて、ただ歩くだけで目を奪うほどに美しい。

小さく交差する太腿も、ふっくらとしていて充実した肉づきが分かる。逆に腰や足首は細く、特にくびれは惚れ惚れするほどきゅっと締まっている。

一方、胸の大きさはさほどでもなかった。厚手の服とはいえ、臀部や太腿に比べて膨らみはわずかなものだった。

（そこが少しだけ残念だけど。でも、綺麗だ、アナスタシア先輩――）

巨乳好きな少年としては、せめてもう少し胸が欲しかった。が、そこを差し引いても彼女は眩しく美しい。緩くウェーブを描く髪からは輝く汗珠が小さく落ちて、まるで彼女の周りにだけ真珠が散りばめられているかのようだった。

その美貌と気高い雰囲気に、周囲は見惚れつつも、声をかけることすら躊躇（ためら）っているようだった。

無理もない。少女の全身からは、一般人とは異なる高貴なオーラが滲み出ているのだ。

「やっぱり違うな、雰囲気からして貴族って感じだ」

「住む世界が違うってのが見てるだけで分かりそうだな」

フラッシュを焚く記者たちも、自然と道を譲ってしまう。前に立つこと自体が不敬だと分かっているかのようだ。

まさに高嶺の花。選ばれし者のみが隣に立つことを許される。口にこそせずとも、皆そう感じていた。

そんな人だかりを、一人、抜けてくる者がいる。

「アナスタシア先輩！　お疲れさまです、どうぞ」

タオルを両手で差し出したのは、先ほど駆けこんできた学生服の少年だった。

「キミか。ありがとう。いつもすまない」

「いえ！　先輩こそ、あんな強い人に勝っちゃうなんて。俺、尊敬しちゃいます」

少年は憧憬の眼差しを隠さず、しかし臆することなく言った。

彼の名は千房好太。ここ正謙学園高等科の一年生である。

「俺、ぜったい勝つって信じてました。だってアナスタシア先輩は本物の騎士ですから！」

好太は目を輝かせて熱く語る。

少女の名は、アナスタシア・フォン・ベルエスパーダという。二年前に日本にやってきた海外からの留学生で、フェンシング部の無敗のエースだった。

好太の言うように、彼女は正真正銘、騎士の家柄だった。

中世から代々続く騎士の家に生まれたアナスタシアは、幼い頃から剣を学び今や達人の域に達している。その実力は広く認められ、日本のメディアからも注目されていた。

そして今しがた、遠方から来た日本人選手と非公式で剣を交えたところである。

「よい試合だった。さすがオリンピック候補だけはある。紙一重だったよ」
「その紙一重を拾えるかどうかがフェンシング、いえ騎士の実力だと思います。やっぱり先輩の勝利ですよ」
相手を称えるアナスタシアに、好太は熱弁を振るう。日本の選手が負けたというのに、明らかに彼女を応援していた。
浮かれ気味の彼に、美少女騎士は、小さく口元をほころばせる。
「――フフッ。キミは変わった男だな」
「そうですか？」
「ああ。わたしに、こうも気負いなく話しかけてくれる」
アナスタシアとて、周囲の視線は分かっているのだろう。外国人。高貴な家柄。一般人とは異なる雰囲気。世間からの注目度。それらが自然と壁になり、嫌いこそせずとも一歩引かせていることに。
だが好太は、美しすぎる彼女の言葉を別の意味に捉える。
「め、迷惑ですか？　俺、先輩のこと尊敬してて……」
「フフ。いや、そんなことは少しもないよ」
アナスタシアは品のある微笑を浮かべてみせた。
「わたしもキミのような後輩は嫌いじゃない。部でも後輩であってくれればとも思う」

「ほんとですか！　でも俺、フェンシングの経験ないし、先輩の足手まといに……」
「そんなことはない。誠意と意思ある者に門戸を閉ざすなど騎士として恥ずべき行為だ。入部してくれるのなら、必ず面倒を見ると約束しよう」
期待をこめた目で言うと、アナスタシアは肩に手を置き、軽く叩いてから去っていった。
（アナスタシア先輩……素敵だ。後ろ姿も素敵すぎる）
背中を覆う長い黄金色。その揺れるウェーブヘアを見つめながら、好太はほうっとため息を漏らした。

――好太が彼女と出会ったのは入学式の当日だった。
寮に入りたてで手間取り、式に遅刻しそうになっていたところを、一人静かにベンチで読書をしていたアナスタシアと会ったのだ。
そのときはまだ何も知らなかった好太は、単純に――一目惚れしていた。こんな綺麗な人がこの世にいたなんて、と思わず立ち止まったのを覚えている。
彼に気づいたアナスタシアは、しばし不思議そうに眺めてから微笑んだ。
「キミは新入生か？　そうか、遅れてしまったのか。ついてくるといい。近道があるから案内しよう」
彼女はそう言って、右も左も分からぬ後輩を助けてくれた。

好太はそのとき、緊張して満足な会話ができなかった。
後にして思えば、彼女はきっと、自分のことを知っているからだと思ったに違いない。
だが何も知らなかった当時の好太は、お礼が言いたくて翌日からすぐに探し回った。
有名人だった彼女はすぐに見つかった。金髪青目の留学生など一人しかいないからだ。
「この前はありがとうございました！　あのっ、お、お名前、聞いていいですか？　あ、俺、千房好太って言います！」
胸の高鳴りを必死に抑えて彼は挨拶した。
「あ、ああ、キミか。なにもわざわざ訪ねてくることもなかったのに」
好太の勢いに、アナスタシアは少し面食らった様子だった。後に聞くと、どうやらあのときにお礼だけは言えていたらしい。けれど初恋で舞い上がっていた好太は、無我夢中で会話を続け彼女を驚かせていた。
「――フフ。変わった男だなキミは。わたしの名はアナスタシア。アナスタシア・フォン・ベルエスパーダだ。よろしく、好太」
呆気にとられていたアナスタシアは、やがて可笑しそうに噴き出し、席を立って正面に立つと、右手を差し出して握ってくれた。
それからだった。好太は足しげく彼女を訪ね、先輩後輩として交流を持つようになった。彼女の素性は後に周りから聞いたのだが、その頃にはすでに、遠巻きに見ているだけにし

ようとは考えられなくなっていた。
（みんなどうして距離を置くんだろう。アナスタシア先輩は、すごく気さくな人なのに）
生まれに誇りを持ってはいるが、それを鼻にかけるような人ではない。むしろそういう人種を嫌っている風ですらある。口数は少なく熱心でストイックではあるが、意外と世話好きな一面などは、話していくうちに分かってきた。
家が貴族で日本の政治家にも顔が利くらしく、教師たちですら少し腫れ物に触るような態度だ。そんな周りのことも理解し、あえて深く関わろうとしないのだと、好太は密かに考えている。
（でも俺、先輩に憧れてるんだ。不釣合いなのは分かってるけど、もっと一緒にいたい。ほんとに入部しちゃおうかな）
思春期真っ盛りな少年は、今日も今日とて彼女に会いに行こうと決めていた。

その日の放課後。
夕暮れ時の渡り廊下を、好太は急ぎ足で進んでいた。
「HRが長引いちゃったよ。まったく、球技大会の種目なんてなんでもいいってのに」
興味のないことに時間を費やされ失礼ながら文句が出る。今の彼にとって、憧れの先輩を見ている時間に勝るものはなかった。

練習熱心な美少女騎士は、今日も遅くまで練習しているはずである。
今日も彼女と会話をし、魅力的な微笑を見たい。そう思って、入り口までの距離すら惜しみ、体育館の窓を覗きこむ。
（いた！　アナスタシア先輩、今日は一人で居残りだ）
他の部員らはとうに帰ったのだろう。彼女は一人、サーブルを手に練習していた。
――ヒュンッ、ヒュ、ヒュンッ！
イメージトレーニングだろう。無人の空間を彼女は剣で突き、斬っている。相手の反応もイメージしてか、瞬時に踏みこむ動作には試合さながらの緊張感があった。
熟達者なら、一目見るだけで達人と知れる動き。そうでない者ですら、優雅でありながら鋭い動きに自然と目を奪われるだろう。
が、後者であるはずの好太は、見て違和感を覚えていた。
（どうしたんだろう。今日のアナスタシア先輩、動きが少し変だ。なんか、胸の辺りを気にしてるみたいな……）
理由は分からないが、彼女は集中しきれていないようだった。白いジャケットとパンツという、一見普通の姿なのだが、なぜかさっきから胸の辺りをチラチラと見ている。
そして、唇を噛みサーブルを突き出した瞬間、
「――ンッ！　あふ……くぅ」

眉根を寄せて声を漏らし、掌を胸にそっと添えた。
「ンッ……はぁ……くぅ、さ、サポーターが、ずれて……」
よく分からないが、とにかく問題があるようだった。心なしか呼吸は乱れ、長い睫毛が揺れている。
アナスタシアは、まるでそれに歯向かうように再度構えて剣を突き出し、
「ンンッ……くぅ、ますますずれて……ンぅっ、はぁ……ッ」
(ど、どうしたんだろ先輩、どんどんおかしくなって……まるで辛いみたいに)
剣を振るたび彼女の様子は変わっていった。胸の違和感が大きくなるのか呼吸はさらに乱れていって、剣捌きにも乱れが生じてくる。
「ンぁ、ぁふぅ……だめ、す、擦れて、胸ッ……力が……」
マスクを外していたことが、変化をより顕著にしていた。見れば白磁のような頬には、薄い汗珠と共に淡い紅色が広がっている。青い瞳はかすかに濡れて、夕陽を反射して揺れていた。
やがて彼女は剣を下ろし、直立したまま小さく身震いする。
「だめ、押さえていないと……胸が、もう……なんて情けない……」
悔しげに彼女は独語した。その表情はどこか切なげで、目を閉じ何かをこらえているかのように見えた。

正直言って好太にはさっぱり分からない。異常があるのは明々白々だが、原因がまるで見当たらない。女性にしては薄めな胸には、特に何かがあるようには見えなかった。

声をかけようか迷っていると、アナスタシアは諦めたように踵を返して歩き始めた。

だが歩みは、普段の凛々しさが嘘のように遅々としていた。上半身の揺れを少しでも軽減させようとしているようだ。

「ン、くぅ……擦れすぎて、こ、こんなにも、敏感に……」

小さく唇を噛みながら、彼女は眉根を寄せ吐息する。その表情は妙に悩ましげで色っぽく、好太は見ていてドキッとした。

（先輩のあんな顔、初めて見た）

クールな美貌を誇る彼女は、今は不思議と弱々しく見えた。何かに耐えて微震える姿は、抱けばガラス細工のように儚く壊れてしまいそうだった。

どうやら練習を終えるらしく、更衣室へ向かったようだ。汗を吸った金の髪が、サラリと室内へ消えるのが見えた。

事情はまったく分からないが、このまま放っておくなんてできない。

少しでも助けになれればと思って、好太はそっと女子更衣室の傍に行く。

（あっ、ドアが開いてる。先輩、閉め忘れて……）

それほど注意散漫になっていたのだろう。いよいよもって心配になってくる。

もちろん覗くのは重大なマナー違反である。いくら優しいアナスタシアでも、さすがに許してはくれまい。

それでも、衣擦れの音すら聞こえないことに好太は不安を覚えた。もしかすると、中で一人倒れているかもしれない。部員も残っていない今、助けられるのは自分しかいない。

言い訳じみていると自覚しつつも、好太はそっとドアの隙間を覗きこむ。

すると――

（え――え、ええっ？　なに、あの――すごい、おっぱいっっ⁉）

見てはいけないものを見たという意識と、あり得ないものを見たという意識が、脳内でごちゃ混ぜになった。

更衣室の中には、確かに一人の美少女がいた。少女はロッカーに背を預け、立ったまま小さく震えている。

着ていた白いジャケットは脱がされ、インナーすらも床に落ちている。手にはスポーツブラによく似た、白い厚手のサポーターがあった。

そして、あらわになっている少女の上半身。そこにあるはずのBカップくらいの二つの膨らみは、しかし――

（おっ――大きい……どうして、アナスタシア先輩の胸は小さかったはず……！）

羞恥や興奮を覚えるより先に、疑問が思考の大半を割いた。

そう。比較的小振りだったはずの彼女の胸が、今、物凄いサイズに変化していた。
一目で思うのは、まるでたわわなマスクメロンのようだということだ。それも最高に食べ頃のもので、隅々までむっちりと膨らみ、ずっしりと重みがありそうである。白い肌は遠目にもなめらかで、浮いた汗が伝う様が瑞々しくて艶めかしかった。
先端にある乳首はというと、こちらは非常に小さめだった。小豆ほどもの可憐な突起は、しかしなぜだかぷっくりと膨らみ、硬くしこっているように見える。
対して乳輪は、巨大な乳房にあわせたように若干大きめだった。色は極薄のピンク色で輪郭が分かり辛いが、なんというか、だからこそ生々しい色気を感じた。
（どうして、きゅ、急に大きくなった⁉　そんなまさか、そんなのあり得ない……！）
たわわな膨らみは、どう見てもFカップ以上はある。巨乳、いや余裕で爆乳と呼べるサイズだ。
そんな素敵なおっぱいが、なぜ先輩の胸に？　好太がそう考えている間、アナスタシアはただじっとして、汗ばむ乳肌を震わせていた。
「ハァ……ハァ……なんて、情けない。少しサポーターがずれただけで……少しの間擦れていただけで、もう、こんな……」
彼女が見下ろす視線の先、極薄色のピンクの突起は、今なお刺激を受けているように、ビンビンに尖っている。声は少し鼻にかかり、どこか甘ったるいものがあった。

やや内股で耐えている仕草も、はっきり言って官能的だ。震える指がそっと近づき、けれど触れずに下げられるのは、まるでそれだけで達してしまうからのようにも見えた。
（先輩、な、なんて、エッチなんだ……素敵なおっぱいが、あんなに汗かいて乳首びんびんに……！）
好太は鼻息が荒くなるのを自覚した。
思考が混乱から淫欲へとシフトしつつある。あのおっぱいに触れられたら、突起を指でくすぐれたら、悩ましい表情を浮かべる彼女を強く腕に抱けたなら――そんな妄想が脳裏をかき乱し、視界がぐるぐると回りだす。
そして――もっとおっぱいを目に焼き付けようと、無意識に顔が前に出て。
――ごんっ。
「ッッッ⁉　だっ、誰だっ⁉」
「あっ――えっと、あのっ……お、俺、俺っ……！」
ドアにぶつかった物音の直後に、アナスタシアと真っ直ぐに視線が合っていた。

四章　エッチなナイトといっぱいエッチ！

「……あ、なるほど！　もっといろんなエッチがしたいんですね？　分かりました、任せてください！」
「ば、ばかっ！　ぅぅ……キミは物怖じがなさすぎるっ」
明るく言ってのける彼を、思わずはにかんでコツンと叩く。
普段はクールで美しい顔は、ぎこちなく男に甘えようとする乙女の拗ねたそれとなっていた。

「――それで、一晩考えた特訓がこれか？　正気かキミはっ？」
夕陽の差しこむ放課後の窓際で、アナスタシアが頬をまっ赤にして呆れていた。
「大丈夫です、肌のことをちゃんと考えて、無添加の洗剤を使いますから」
好太は笑顔で持ってきたボトルの栓を捻る。
二人は今、体育館にあるシャワールームに来ていた。それも女子用で、本来なら好太がいていい場所ではない。誰もいないのをいいことに無断で入りこんだのだ。
アナスタシアはショーツ一枚の姿だが、それを覗きにきたのではない。名目としては敏感おっぱいのさらなる特訓である。
その内容というのが、
「この窓を、手を使わないで、おっぱいで掃除してください」

好太はそう言って、開けたボトルの中身を、アナスタシアの豊満な乳房に垂らしていく。
「あぁぁ……ひんやりする……ゾクっとするっ……」
「今回はおっぱい全体を刺激してみようかと。乳首だけじゃなくて、全体を使って掃除してみてください」
「まったく、なんてことを考えつくんだキミはっ……」
アナスタシアは唇を噛んだが抵抗する素振りは見せなかった。
どの道今日は、彼女がここを掃除することになっていたのだ。普段からよく使うフェンシング部員として快諾したことだ。
弟のわがままを聞く姉のように彼女はため息をつき、そっと窓に膨らみを押し当てる。
「はぅ……窓も、ひんやりする……」
ほどなく初夏とはいえ、まだ外は冷たさを残している。その外気が窓のガラスを冷やしていた。
けれどその冷たさすら、今の彼女には快感だった。
「ハァ……む、胸で、こすって……泡、垂れないように……」
柔らかにつぶれた白い乳肉を、円を描くように動かしていく。埋まった乳首も動きにあわせて、ゆっくりと円を描いていく。
表面には泡がたっぷりと乗り、決して鋭く擦れたりはしない。にもかかわらず、豊満な

乳房は着実に感度をあげていき、金髪の乙女に淫らな感覚を与えていった。
「こ、こんなことで、わたし……ああ、感じてしまう……ガラス、冷たいのに、胸は、熱くなってきて……」
アナスタシアは熱く吐息し早々に快感を訴え始めた。両手を窓につき腰を使って回す姿は、まるで後ろから犯されるのを誘っているかのように艶めかしい。
「はぁあ……女性の胸にこんな真似させるなんて、キミは本当に……ぁあ、悪い男だ……」
「そんな。先輩が本気でいやがるようなこと、俺がするはずないじゃないですか」
少年は背後から忍び寄り、ゆったりと踊るまろやかなヒップに両手を添える。
「あッ……だめ、好太……」
「いじめられて感じちゃうこと、俺、分かってますから。先輩がほんとはすごいエロいってことも」
彼はそう言って、両手の指の先だけを使ってくすぐるようにヒップを刺激する。
「おっぱいも素敵でエロいけど、先輩のお尻なら俺、同じくらい愛せそうです……」
「ンぁあだめぇ、お、お尻っ、くすぐったいぃ……でもっ、感じちゃう……だめ、おっぱいもなんだかじんじんしてきて、ああ乳首ッ、立ってきちゃうぅ……！」
勃起乳首はやはり敏感で、たわわな果実にさらなる官能を与えていた。ぷっくりと膨らみを持ったせいか、窓の外側から見ると、薄いピンクの可愛いニプルが深く乳肉に刺さっ

ているようにも見えた。
快楽に流され微震える少女は、吐息を熱く湿らせながら乳肉を一層、深く押し当てる。
「だめぇ……恥ずかしいのに、変だと思うのに、身体、止まらない……おっぱい、感じちゃうぅ……」
「先輩、どんどんエロくなってきますね。もう自分からエッチな声だして動いてますから」
「いわないでぇ……自分でも、まだ、信じられないからぁ……」
少年の卑猥な言葉にすら、少女はすでに興奮を覚えるようになっていた。
「好太……わたし、わたしっ……」
「ほしいんですね？　分かります。だって先輩のパンツ、もうシミでいっぱいですから」
淫らに揺れ踊るヒップを捉えると、少年の指がブルーのショーツをすすっと下ろす。
「好太、み、見ないで……恥ずかしい……！」
口はそう言うも、身体の方はできあがっていて割れ目はしとどに濡れていた。粘性を含んだ透明な蜜は、ショーツが膝まで下ろされてさえ、ツゥ……と細長い糸を引いた。
そのピンクの割れ目にカリをあてがうと、少年は背後から金髪の乙女を貫いた。
「ンあああッ！　好太ぁ、ハァハァだめ、わたしっ、掃除っ、できなくぅゥ……！」
「だめですよ先輩、ちゃんとおっぱい動かしてください。一つしかない窓なんだから、丁寧にお願いしますっ」

「そんなぁッ、ああだめぇ気持ちいいッ――力、抜けちゃうゥ……！」
ぱちゅぱちゅと尻肉を打たれながらアナスタシアは愉悦に震えた。なんとか乳房で洗おうとするも快感で腰が言うことを聞かず、ビシビシと軋む窓に向かって両手と頬を預けるばかりだ。
「ハァハァ、だめぇ、ああンンッ……おっぱい、感じちゃうぅ……チンポ挿されると、おま○こも、おっぱいもぉッ……！」
まるで乳房の性感までもがペニス一つに支配されていくかのよう。抽送されるたび乳房まで悦び、アナスタシアは息を弾ませ戸惑い喘ぐ。
と、そのときだった。彼女の青い目が、窓の外付近を歩く女子の姿を捉えた。
「好太っ、だめだ、外に人が……気づかれてしまう……！」
ここは女子用のシャワー室だ、当然目隠しはある。が、隙間はあるし、こうガラスに密着していてはさすがに外からでも見えるだろう。それでなくとも年頃の生徒だ、おっぱいを張りつかせよがっていれば見ただけで勘付くかもしれない。
それなのに好太は、慌てるアナスタシアをなおのこと激しく肉棒で責めたてる。
「ひゃああンッ⁉　そんな好太ぁぁッ、だめぇ、気づかれる、バレちゃうゥッ……！」
「はぁはぁ、平気ですっ、声さえ小さくしてれば……それに先輩のおま○こ、きゅうきゅう締めつけて放してくれないですっ……！」

少年は汗を垂らし、忙しなく腰をグラインドさせていく。すでに射精は間近に迫り睾丸はきゅっと持ち上がって、発射へのカウントダウンを開始していた。

その情熱の腰突きに、アナスタシアは大いによがって声を殺すのが精一杯だった。

「ンンンンッ！　ハアッハアッハアッ！　らめぇ好太ぁ、そんなずんずんしたらぁ、ンッ、あふうンッ！　おま○こ蕩けちゃうゥ、声ッ出ちゃうウッ……！」

涙を流し哀願するように彼を見るも、火照った身体はすでに静止を受けつけない。ただひたすらに彼に愛でられ、昂り、悦び、ゾクゾクするような興奮を覚えつつ官能の高みへと昇っていく。

「ハアッハアッ、人、いるのにぃ、恥ずかしいのにぃィ、感じちゃうゥ、わたしイっちゃうウッッ……！」

――ぐちゅっぐちゅっぐちゅっぐちゅっ、むにゅむにゅたぷたぷるっ！

もはや乳房のつぶれる感触すら今の彼女には快感だった。冷たい窓に押しつけられながら乳肉をぐりぐりと回していくだけで、熱いような冷えたような、えもいわれぬ刺激が乳腺を焼く。

また彼の言うように、濡れそぼった淫らなおま○こはねっとりと蠢いて肉棒をしゃぶっていた。女の悦びに目覚めた蜜壷は抽送にあわせてリズムよく締まり、大量の愛蜜をこぼしながら美味そうにサオを根元まで咥えこむ。

やがてペンが動きを止めると、少年の手が再び鏡を彼女に向ける。
「さあ見てください。これが今の先輩のおっぱいです」
鏡に映った豊満な乳房には、『わたしのデカ乳はどスケベです』『すぐに勃起するスケベ乳首です』『練習しながらイケちゃう乳首なの』と、ますます卑猥なことが書かれていた。
それを見たアナスタシアは、息を詰めて唇をわななかせ、けれど、
「ああそんなぁッ――あはァ、あはァアンンッッ……！」
――びんっ、びんびんっ。びくびくっ……
勃起乳首とピンクのクレヴァスが小刻みに震えていた。
「はぁァ――あはぁァ……ンふぅンッ……！」
「先輩……おっぱいの落書き見せられただけで、軽くイっちゃったんですね？」
好太も内心驚いていた。まさかロクに愛撫もしないでイケるとは思わなかったのだ。
女性の性感は心の昂りと連動するという。言葉と文字の同時責めに、興奮しすぎてイったのか。
ともあれ彼女は、否定もせずにひくひくと震えて薄目で虚空を見つめている。マゾな心が淫らな愉悦を味わっているのは間違いなかった。
「ほんとにいやらしいんですね、マゾすぎますよ。こんなとこ見たら、ほかの人はなんて思うでしょうね」

「ふあぁあッ、ええっ……」
「ほら、耳を済ませて。足音が近づいてきますよ」
少年が言うように、すぐそこの廊下をコツコツと足音が通り過ぎていく。恐らく巡回の時間だったのだろう。
見つかってしまうかもしれない恐怖が、身動きの取れないアナスタシアを責め立てる。
「ハァハァ、いやぁ、怖いっ……それなのに、なのにぃ……！」
彼女は息を殺そうとしたが、逆に呼吸は早まるばかりだった。興奮しているに違いなく、乳首はますますピンと尖り、クレヴァスはトロトロと蜜をこぼす。半目になった青い瞳には、怯えと共に陶酔の色さえ見え隠れしていた。
「フーッ、フーッ、ンふぅンッ、いやぁ……」
「先輩、おま〇こがお口開いちゃってますよ。おっぱいの先っぽも尖ったままです。ほら、クリトリスだって立ってますよ」
少年が耳元で囁くと、彼女は泣きそうな顔で唇を噛む。
「フーッフーッ、言わないで、ああ見ないで……ハァ……だめぇ、おま〇こ……クリ……熱く、なっちゃぅ……」
こんこんと湧き出る愛蜜の中、薄皮を脱いだ小さな真珠がうっすらと顔を出し始める。軽く尖ったその真珠は、こんな状況でも発情が止まらない女体の淫靡さを物語っていた。

その真珠に吐息をかけると、彼女はびくびくと腰を震わせ、それだけでまたイキそうになる。興奮の度合いはすでに最高潮にあると知れた。

（でもまだですよ。先輩の中のエッチな本音、全部俺が聞いてあげますから）

かなり強引だが、まずはマゾだと理解させられたと思う。次は彼女が自分のものだと刻みこむ番だ。

少しの罪悪感と、強い愛欲を噛み締めながら、好太はスマホを取り出し半裸の恋人に向けた。

「ァァ……ァアなにをぉ、あっ、ああらめェ⁉　しゃっ、写真は、写真なんてぇッ……！」

意図を察したアナスタシアは、余韻も冷めやらぬままカタカタと歯を鳴らし始めた。

「いいえ撮ります。撮りまくります。これで先輩は、俺から離れられなくなるんです。俺のものになるんです」

脅しているようで気が咎めるが、彼女の望みであることも分かっていた。家の事情と恋路の狭間で苦しむ彼女を解放するには、無理にでもすべてを奪ってあげるべきなのだ。

彼女もきっと、乱暴なほどに奪われることを望んでいる。マゾな心が悦んでいる。そう思って、少年はしきりにシャッター音を鳴らす。

――カシャッ、カシャッ、カシャッ、カシャッ……

「おぉ……先輩のおっぱい、おま〇こ、全部撮ってますよ。学校のトイレで縛られてイっ

てるエッチな姿……」

「はあ言わないでェ、ああッ、あッ、奪われてる、わたし奪われてぇッ……されてるぅ、好太の女にィ、好太の、マゾ牝にィィ……！」

かつてないほどの激しい羞恥がアナスタシアの心を焼いていく。淫らな姿、卑猥な落書き、神聖な学び舎であるにもかかわらず濡れてしまった浅ましい事実、それらすべてを彼に掌握され、理性が焼き切られていく。

やがて彼女は青い目をトロンと蕩けさせると、無駄な抵抗をやめ、ヒクつくクレヴァスを小さく前に差し出した。

「ハァハァハァッ、う、奪って、ください……わたしのすべて……マゾ牝なアナスタシアをォ……」

進んでクレヴァスを撮影されながら恍惚に首をしならせる。縛られた肢体をモゾモゾさせる。新たな愛蜜をポタリと滴らせ、昂っていく美少女マゾ騎士。

「ハァハァ、あ、頭ッ、ぽぉぉっとなっちゃう……身体熱くなってェ、おま○こうずうずしてェ、イっちゃうゥ、撮られてるだけで、アナスタシア、イっちゃうゥ……！」

薄暗い個室でもそれと分かるほど白い肢体は汗だくだった。火照った肌からは濃密な発情臭が漂い、トイレ全体を甘ったるいにおいで満たしていた。

（すごい、なんて淫らなんだ、アナスタシア先輩……）

今の彼女なら放置するだけで勝手にイキそうだ。それくらい表情が緩み、目が恍惚で蕩けている。

その様子に満足した好太は、スマホをしまい、今度はポケットから洗濯バサミを取り出した。

「ハァ、ハァ、好太ァ、さ、触ってぇ……」

「まだですよ。次はおっぱいです。先輩のおっぱいがどれくらいエロマゾなのか証明しますから」

これはおっぱい星人ゆえの探究心だった。アナスタシアがマゾなのは証明されたが、おっぱいにはまだ開発の余地がある。このはち切れんばかりに実った果実を愛でずに終わるなんて、おっぱい星人としてのプライドが許さない。

このHカップはまだまだエロくなる。そう確信して洗濯バサミを一つ寄せると、アナスタシアは意図を理解し、また唇をわななかせた。

「ま、まさか、そんな……だめぇ好太ぁ、そんなの、そんなのきっと痛い……！」

「大丈夫です、先輩のおっぱいは超敏感でエッチですから」

そう言って彼は、ついに乳肉の一部を挟んだ。

途端、アナスタシアは目を丸くして大きくわななき、

「ンアッ〜〜あひいイイインッッ！」

悲鳴じみた嬌声をあげて、ラビアからぷしゅっと蜜を飛ばした。
「ハアッハアッひいいッ！　い、痛いぃ、おっぱいっ、ぎゅううっってぇぇッ……だめぇ好太ぁ、外してぇ、お願い、お願いぃッ……！」
「でも声は気持ちよさそうですよ。ほら、乳首もさっきよりびんびんになって」
ここぞとばかりに大胆さを発揮し、少し意地悪く笑いながら勃起乳首を指先でくすぐる。
「ああッいやぁンッ……！　らめぇ、乳首は、弱いのぉン……」
「乳首だけじゃないですよね。おっぱい全部がおま〇こ並みに性感帯なんです。はい、もう一ついきますよ」
「ひあああらめぇッ！　二つ目らめ、そんな、そんなッ、ホオオオンンッッ！」
二つ目が投入された途端にも、アナスタシアは嬌声を張り上げた。そう、嬌声だ。鼻にかかった甲高い声音には、確かな官能の響きがあった。
「ハアッハアッひいッひいッ！　痛いぃ、痺れるぅぅ、おっぱいじんじんしてぇ、熱くってぇぇ、ああ壊れる、おかしくなっちゃうううッ……！」
いやいやと首を振りながらも、大きく喘ぐ唇からは舌が溢れてしまっていた。その先からは唾液が滴り、谷間に落ちてトロォ……と長い糸を引く。
目尻と眉尻をトロンと下げて、小鼻までヒクつかせるその表情は、好太でなくとも見ればよがっていると分かる。

「いぃ、痛いのにいぃ、わらしッ、感じてりゅぅゥッ……おかしいのぉ、おっぱいじくじくして、ぐんぐんなにか来て、あ、熱いの、爆ぜちゃいそォでぇェ……！」
「いいんです先輩、爆ぜちゃっても。感じてもいいんです。よがっていいんです。俺の前でだけは、スケベでどマゾなほんとの顔、見せてください」
少年が優しげに囁きかけると、青い瞳にかすかな理性の光が灯った。
涙で揺らめくその光には、強い依存心と、深い愛情がある。
「ハァハァ……好太、わたし……スケベなの。どマゾなの。大きくて、敏感で、すぐ勃起して、痛くされたって感じちゃうくらい、いやらしいおっぱいなの……！」
けれど、と続けると、彼女は精一杯の勇気と恋慕をこめていった。
「けれど――そんなおっぱいが、わたし、好き。大好きなの。だからもっといじめてください。いやらしいマゾ乳、キミの――あなたの手で狂わせてェ……！」
「先輩っ――！　ああ俺も大好きです。最高のおっぱいです。だからいじめます、愛をこめて狂わせますっ！」
彼女の口から、ついに好きという言葉が聞けた。あれほど疎んじていたおっぱいを、好きになってくれたのだ。
それが嬉しくて仕方なく、好太は大いに燃え上がった。再び洗濯バサミを手に取り、次々と乳肉を挟んでいく。

「ホオオンッ、はううンッッ！　ああ痛いぃッ、でも感じちゃううッ！　いいのォ、おっぱい燃えちゃう、はああじゅくじゅくして爆ぜそォッ！」

マゾ乳と認めた彼女は、もう迸る快楽を隠さなかった。たわわな果実がみるみる赤くなってきても、ひたすら背筋を愉悦に震わせ、ラビアから愛蜜を滴らせる。表情も淫靡に蕩けきって、口端からトロトロと唾液をこぼした。

さらに両の乳首までもがくいっと挟みこまれると、急所への官能が効きすぎたのか、便座をガタガタと揺すってわなないた。

「はああううウッッ！　ひっ、ひいいッ、それらめェ、乳首ッ、乳首イクぅッ……アッアッらめ、ほんとに爆ぜるゥ、なにかきちゃう、奥からなにか、なにかがぁアッ……!?」

アナスタシアは全身を激しく揺すってよがる。背中がタンクにごつごつ当たるがまったく気にならないらしい。それほど感じてハヒハヒと喘ぎ、愛蜜をタラタラと垂らしていた。

「好太ぁアッ、わらしらめぇェッ、ほんとにきちゃうゥ、すごいのが、もうッ、すぐそこ、乳首までエッ！」

「イキそうなんですね先輩。いいですよ、遠慮しないで思いっきりイってください。最後の刺激、あげますから」

好太は言って、複数集まった細い糸の束を手にした。

よく見ると糸は、枝分かれするようにすべて洗濯バサミと繋がっている。

その糸の束を、彼は勢いよく引っ張った。
――ぶつっ、ぶつぶつぶつぶつっ！
「ひいいあああイクううううンンッッ！」
乳房に食いこんだ洗濯バサミが一斉に引っこ抜かれていた。勢いがあったため、まさに引き千切らんばかりだった。
もちろん千切れはしないものの、赤く染まったたわわな乳房はぶるるんっ！　と大きく跳ね上がる。
そして、ぴんぴんに膨らんだ先端の突起が、限界を迎えたように震えて、
「あっぁああアアくるううッ！　きちゃう、熱いのきてッ～～～はああでるううンンッ！」
――ぷしゃっ！　ぴゅるるるるるうううっ！
白い何かが大量に噴き出て、勢いよく宙を舞っていた。
「せ、先輩、それ、母乳っ？　すごい、感じてミルク出しちゃうなんて！」
おっぱい星人の好太にしても、これはさすがに予想外だった。
これまでの開発の結果なのか、もしくはそういう体質だったのか。アナスタシアは、とうとう母乳まで出るようになったのだ。
「ハアハア、そんなぁ、みっ、ミルクっ、出るなんてぇえっ……⁉　うそ、こんなの、は、初めてぇえっ……！」

わたしのデカ
乳はドスケベです

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

ドキドキラブラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

※二次元ドリームノベルズは18歳未満の方は購入できません

二次元ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

サイズ:文庫

リアルドリーム文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!